

梶村秀樹の「未発の契機」 —植民地歴史叙述と近代批判—

車 承棋

結果論的に勝ったものが「官軍」であると確認するだけの歴史研究なら、無意味どころか有害でさえあり、うもれてしまっている未発の契機を探り当てることにこそ意味がある — 梶村秀樹「朝鮮からみた明治維新」

目次

1. 植民地と近代
2. 内在性
3. 「未発の契機」
4. 翻訳不可能性
5. 視差的観点

1. 植民地と近代

1980年代後半、既存の植民地歴史叙述の観点をめぐって韓国歴史学界内部の対立が表面化して以来、「近代性」に対する包括的反省が始まった1990年代末まで、韓国近現代史研究において植民地の意味を解釈する立場はおおむね次のふたつの立場に大別して理解されてきた。すなわち、「植民地収奪論」（以下、「収奪論」と略）と「植民地近代化論」（以下、「近代化論」と略）とである。植民地歴史叙述の観点がこのように二分される契機としては、「近代化論」の登場が決定的であった。

正確に言えば、「収奪論」と「近代化論」を同一の次元で対立するふたつの解釈枠組として捉えたとしたら、それはすこし誤っている。このふたつの立場は、はっきりとした対立構図のなかで扱われてきたが、互いにある統一された歴史観または歴史哲学にもとづいて、同程度の規模の実定性（positivity）を形成しながら競争を通じて展開してきたものではないからである。実際はそれとは異なり、過去の実証主義史学と植民地史学の残滓を乗り越えようとする試みとして、内在的發展論および「収奪論」が1960年代後半に登場し、以後、韓国歴史学界の支配的な解釈枠組として生き続けてきた。これに対して、主に経済史学界を中心として、「近代化論」が植民地下で進んだ近代化の水準を再評価し、「収奪論」の「民族主義的偏見」に異議を申し立てた、という方が事実に近いだろう。

ところが、「近代化論」の立場から既存の観点到異議申し立てをすることで、根本的に同一とはいえないさまざまな分析枠組が、「収奪論」という単一の名のもとに回収される効果が生じた。そのため、1960年代後半から登場し、植民地主義的他律史観を乗り越え、歴史の主体を見出そうとした多様な枠組を「収奪論」と名づけること自体、おそらくは「近代化論」の立場を代弁することになりうる¹。

厳密に言えば、「近代化論」以前の植民地歴史叙述の諸観点、すなわち（いわゆる植民地史観の支配的な影響のもとで生産された停滞性論・他律性論などを除けば）収奪論、資本主義萌芽論、内在的發展論などは、根本的に等しい立場に立っているとはいえない²。狭義の「収奪論」が日本帝国主義の暴力性と罪悪性を暴露することで、むしろ朝鮮民衆の没主体性と植民地性を認める逆説的な結果を生み出したとすれば、資本主義萌芽論は植民地朝鮮を普遍的歴史発展の法則のなかで理解することで、むしろ植民地という位置の特異性を見逃す結果を生み出したといえる³。そこから、資本主義萌芽論では納得させられない歴史的特殊性については収奪論で、収奪論が捉えられない主体性については資本主義萌芽論で説明するという、相互に代理補充する体制が形成されてきた側面は否定できないだろう。

¹ たとえば、チョ・ソクコン「収奪論と近代化論を超えて — 植民地時代の再認識」（『創作と批評』1997年夏号 ＊韓国語）。この論考は、「収奪論」対「近代化論」という単純な対立構図の克服を提案する修辞を用いながらも、その実、「収奪論」に対する「近代化論」からの解釈をより一般化された形態で反復してしまっている。

² この点を問題化した論考としては、李洪洛「内在的發展論批判に対する反批判」（『歴史批評』1997年冬号 ＊韓国語）を参照。

³ 李洪洛前掲論文、pp.231-232 参照。

対照的に、内在的發展論は朝鮮内部の動力を植民地、世界資本主義および階級闘争の展開と連関させて理解しようとした点で、前のふたつの立場とは区別される。もちろん、近代植民地を経験した「民族」を歴史の主体的単位として設定しながら成り立つ叙述形式は、不可避免的に収奪論、資本主義萌芽論、内在的發展論を複雑に、時には無反省なまま混合させてしまっていた。しかし、内在的發展論は「民族史」の自己同一性に還元されえない重要な契機を内包しているように見える。とりわけ 1960 年代半ば以降、内在的發展論の立場を一貫して堅持しながら朝鮮近現代史を探究した梶村秀樹（1935～1989 年）の場合、「近代化論」によって一般化され、相対化されてしまった「収奪論」には回収しつくせない観点を示している点で注目に値する。

1990 年代末、植民地歴史叙述の観点をめぐる論争が「収奪論」と「近代化論」のあいだで展開されていた当時、この両者を批判しながら「植民地近代性論」（以下、「近代性論」と略）が登場した。「近代性論」は概してポスト・コロニアリズムに理論的根拠を置き、植民地と近代とが相互拘束的に作用する世界体制を視野に入れながら、「植民地の近代」の特異性を解き明かそうとした。この立場から観察すれば、表面的には極端に対立しているように見える「収奪論」と「近代化論」は、近代を成し遂げねばならない不可欠な段階と理解する点では実は共通の基盤に立っているに過ぎなかった⁴。

しかし、梶村秀樹の内在的發展論は、そもそも「収奪論」に還元できるかどうかとも疑わしいが、近代を「成し遂げなければならない不可欠な段階」として理解していたと断定できるかについても再検討が必要である。「内在的」観点が近代的「発展」というビジョンと結ばれる関係を解き明かさないうまま、収奪論や資本主義萌芽論などと曖昧にひと括りに分類してしまうことで、彼の「内在的發展」

論を「克服」したと、はたしていえるだろうか。もしかすると、「内在的」観点と近代的「発展」との関係を一貫して思考し続けた梶村の関心は、「植民地の近代」の特異性を明らかにしようとする「近代性論」の課題にすでにして出会っていたのではないか。

本論考では、朝鮮近現代史の歴史叙述において梶村秀樹が堅持しようとした「内在的發展論」の立場が、植民地と近代との関係、ひいては朝鮮と日本との関係をいかに説明しているのかを検討し、そこから梶村の思想的キーワードを抽出することによって、近代に関する彼の批判的観点を再構成したいと思う。これは、ただ梶村の歴史観、植民地観や近代の概念を説明するにとどまらず、植民地の歴史を見据える今日の私たちの観点を反省に付すきっかけともなるだろう。

2. 内在性

梶村秀樹が自ら標榜した朝鮮近代史叙述の方法が「内在的發展論」であったのは、なによりも彼が歴史叙述の観点として「朝鮮内部」の視座を設定しようとしたからである。しかし、考えてみればいぶかしい。日本人の歴史家にして朝鮮内部の視座を設定するとは、なにを意味するのか。戦後日本社会に属している叙述者が近代初期の朝鮮内部の視座を持つとは、いったいどのような事態なのか。叙述する視点と叙述される視点とのあいだのこのずれは、いかに理解すればよいのか。この問いを念頭に置きながら、梶村のキーワードを考察してみよう。

大きく見れば、内在的發展論に対しては次のふたつの方向からの批判が成り立ってきたといえる。

ひとつは、その「特殊主義」の逆説に対する批判といえる。そもそも全地球的な展開を本質とする資本主義的近代世界において、民族単位で「内的」な動力を捜そうとする観点は、民族主義が作りあげたイデオロギー的状况を理論的基礎にしようとするため、崩壊せざるをえないとする批判である。内在性の基礎となる民族単位そのものが全地球的な資本の展開（あるいは「近代化」）の一結果であるがゆえに、内在性を探ろうとすればするほど、逆に外部に起源を持つ近代化を肯定することになる転倒した歴史的観点に立たざるをえない

⁴ 「内在的發展論」が普遍的な近代概念を前提していると批判した先駆的指摘として、並木真人「戦後日本における朝鮮近代史研究の現段階——『内在的發展論』再考」（『歴史評論』482 号、1990 年）を参照。「近代性論」の立場から「収奪論」と「近代化論」を批判する議論として、趙亨根「韓国の植民地近代性研究の流れ」（コン・ゼウク／チョン・クンシク編『植民地の日常——支配と亀裂』文化科学社、2006 年 *韓国語）を参照。

ということである。民族主義や国民国家に対する批判的文脈から、こうした批判がよく申し立てられてきた⁵。しかし、これらの批判は自らまたイデオロギー的状况に巻き込まれてしまう。「内／外」の生産は、それ自体歴史的先験性（*historical a priori*）を構成している近代の産物だが、その歴史的先験性に対する批判とともに、内と外が持つ「現実性（actuality）」を探究することもまた歴史学の課題だからである。この具体的な課題をより上位の（あるいは底辺の）歴史的条件に対する問いで解消することも、また「近代の反省」的な思考が置かれているイデオロギー的状况だといえよう。

もうひとつは、内在的發展論では朝鮮史に対する停滞性論・他律性論による説明を克服しようとする主観的な目的が先行してしまい、近代史の普遍性のなかに植民地朝鮮を還元してしまったとの批判がある。これは内在的發展論が宿す「普遍主義」的欲望に対する批判といえるだろう。全地球的な資本主義発展の専一的過程が植民地に転落する運命に処したアジアの一隅でも発見できると主張することは、叙述者の意図にかかわらず、朝鮮を普遍的な進歩の歴史のうちに回収する結果を生み出す。要するに、近代的变化に向けて舵取りができる朝鮮の「主体的」動力を強調しても、その「主体性」は常に「普遍性」の一契機としてのみ

捉えられることになる⁶。

これに対して、内在的發展論を擁護する立場からは、内在的發展論は西欧に起源を持つ「普遍主義的」近代を賛美するものではないとの反駁がある。この立場からすれば、内在的發展論の視角は、資本主義の全地球的展開の一側面として植民地を理解するがゆえに、西欧的近代を擁護するよりも歴史的現状そのものを直視しようとした結果であるという⁷。しかし、特定の歴史叙述の観点が西欧的近代に肯定的な価値を付与するか否かは、その観点の近代的限界を測る基準としては、たいした重要性を持たない。資本主義的近代化に対して価値論的一倫理的に否定的な立場を取っても、あるいは内容的に歴史的特殊性で満ちたとしても、特定の地域の社会・経済単位の内側で資本主義的發展の指標を探そうとする視座は、資本の全地球的展開の必然性を唯一の現実と見做し、その条件の上でのみ一国史を叙述しようとするため、いわゆる近代の普遍史的過程を否定できなくなる⁸。

それゆえ、問題はなお「内在性」にある。梶村が探究した「内在性」とはどのようなもので、それはいかに「内在的」であることができるのか。

梶村は朝鮮近代史および植民地に対する既存の歴史叙述の観点に異議を申し立てることから研究を始めた。従来の朝鮮近代史研究、とりわけ日本における朝鮮近代史研究の支配的傾向は、朝鮮を他律的存在、アジア的停滞性を乗り越えられなかった社会として叙述するところにあった。これに対して、梶村は「内在性」の観点を提起しながら朝鮮の歴史を叙述しようとする。

朝鮮近代史を世界史的連関の中でとらえる

⁵ おそらく、このような批判の代表的な例として、近年、金容燮（1931 年～、延世大学名誉教授、農業史）の内在的發展論を批判して韓国歴史学界で論争をひきおこした尹海東の観点を挙げることができる。彼は、金容燮の内在的發展論を強力な一国的發展論と規定し、朴正熙政権の成長イデオロギーと同一の論理的基盤の上に立っていたと批判する。金容燮の内在的發展論の動機は、なにより「国民作り＝国民化の過程でイデオロギー的基盤を提供すること」にあったからだ（尹海東『『隠された神』を批判できるか——金容燮の内在的發展論』同『近代歴史学の黄昏』チェックハムケ、2010 年、pp. 57-58 *韓国語）。そのため、民族主義あるいは国民国家イデオロギーの運命と同じく、植民地史観を乗り越えようとした内在的發展論は、結局、「反植民地主義（歴）史学的植民地主義（歴）史学」（同 p. 59）として、一種の転倒した植民地史観に帰着してしまう。尹海東はさらに論争の過程で、内在的發展論について「統一民族主義あるいは分断克服」という一種の「民族のユートピア」を未来の幻想として前提することで「種的言説の体系を歴史主義の名のもとに自己のアイデンティティとして鮮明に掲げるイデオロギー」だと批判している（尹海東「エビゴーネンの時代に『内在的發展論』を問い直す」『民族文化論叢』47 集、2011 年、pp. 52-53 *韓国語）。

⁶ 並木真人前掲論文参照。

⁷ 李洪洛前掲論文参照。

⁸ もちろん、梶村が西欧的近代に対して「内容的に」批判的であったのはいうまでもない。物質的・文明的過程として西欧的意味の近代化を追い求める方向が「だめな道なのは、ある意味では決して追いつけないからでもあるが、追いこした途端に空虚さに直面するだけ」だという陳述でも、彼の批判的な立場は明白である（梶村秀樹「“やぶにらみ”の周辺文明論」（1985 年）『梶村秀樹著作集 第2巻 朝鮮史の方法』明石書店、1993 年、p. 162）。ところが彼の近代批判は、物質的・文明的近代化だけではなく、「近代的自己認識（普遍的主体）」にも向けられていた点で、普遍主義的な前提を脱する可能性を内包していた。ここで特に植民地と朝鮮という存在が重要になる。

という方法は、ある意味では古くから行なわれてきている。むしろ、それだけで「列強の角逐の場としての朝鮮」の歴史を説明できるとされてきた。今日必要なことは、そのような外圧を、朝鮮史にとっての意味づけにおいて、内在的発展との連関においてとらえなおし、正當に位置づけることである⁹。

ここで内在的「発展」という表現が使われているが、この表現は、ある共同体の内部の独自の時間性を確認可能な年代記的指標に必ず変換できるということを意味するのではない。むしろ強調点は、「内在性」自体にある。彼の「内在性」は、日本帝国主義が敗北し、朝鮮が解放されたという事実、そして北朝鮮では社会主義的改革が、南朝鮮では資本主義的発展が進行したという現実から出発して、過去にその「萌芽」を見つけようとする転倒した観点から生じたものではない。確かに、彼は他律性論を脱して朝鮮の近代史を叙述しようとしているが、その視線は現在の起源としての「萌芽」の発見より、「外圧」と「内在的発展」との連関を再設定することに向かっている。それまで朝鮮近代史の特殊性に関する支配的な説明方法であった「外圧」を、まさにその「外圧」の対象であった朝鮮の「内部」から逆転させて見ようとするのである。いわゆる世界史的連関のなかで朝鮮を見るという観点がしばしば近代資本主義の世界史的展開を朝鮮という特定の地域で確認する結果を生むのとは対照的に、朝鮮の「内部」から世界史的連関を再構成しようとする視座である。したがって、彼の「内在性」論は、決定論的というよりも、関係論的だと認められる。彼のこうした視座は、同時代の日本を検討する時、特によく現れる。

言うまでもなく、現在の南朝鮮の労働者を直接・間接に日本帝国主義のメカニズムの最底辺に組み込んでいる体制の上に、日本の資本主義社会が存立している¹⁰。

いいかえれば、梶村にとって「内在性」とは、ある特定の社会—経済単位のなかでその固有性の決定要素ないしは起源を探す作業としてではなく複雑で不均等な関係網のなかでその関係の性格を規定する契機として意味を持つといえる。もう少し一般化すれば、不均等な資本主義世界体制のなかでその世界体制の性格を規定するひとつの関係項として植民地が存立しているということ、そして植民地は強大国や帝国主義国家から外圧を受ける存在にとどまらず、不均等な体制を維持させ、変動させる変数として、その体制のなかでひとつの項として作用している。この観点は、彼の「内在性」概念を理解するのに必須であると思う。

実は「内在性」とは、それ自体、近代的な人間観・世界観の全体を特徴づける本質的な観点である。いかなる超越者や超越的な視線も排除または内面化し、自己決定の根拠を自己内部に定礎しようとする試みこそ、近代的思惟の産物にほかならない。先に決定されていること、あるいは外部の法を、一方では否定し、また一方では内面化する弁証法的過程を経て近代的自我に対する規定が誕生したのは、周知の事実である。梶村の「内在性」も、基本的には近代的思惟の準則を守っているように見える。植民地化と「ゆがみ」にもかかわらず、朝鮮の内部にその社会—経済発展の動力を発見しようとしているからである。しかし、それが単に「一国史」という近代国民国家の特権的なナラティブに還元されないのは、朝鮮という単位が世界資本主義、特に日本資本主義との脱境界の関係のなかで理解されているからである。

ならば朝鮮近代史の「内在性」を貫いて持続する動力とはなにか。梶村にとって、朝鮮の内在的発展の最も根本的な動力とは「朝鮮民衆」であった。

3. 「未発の契機」

梶村は、日本近代史の分野で「民衆史」という領域を主導的に開拓した歴史家の色川大吉が提起した「未発の契機」¹¹という表現を領有 (appropriate)

⁹ 梶村秀樹「朝鮮近代史の若干の問題」(1964年)『著作集 第2巻』pp. 37-38。

¹⁰ 梶村秀樹「排外主義克服のための朝鮮史」(1971年)『梶村秀樹著作集 第1巻 朝鮮史と日本人』(明石書店、1992年) p. 46。

¹¹ 色川大吉は『明治精神史』(黄河書房、1964年/増補版1968年)で、完結した「思想」よりも民衆の未決の精神史に注目しつつ、歴史の底辺に視座を据え、そこに流れる民衆の精神から「未発の契機」を捕捉しなければ本当の思想の自立はありえないと主張した。

し、内在的発展の動力を説明しようとする。

歴史は正しいものが勝つとは限らない残酷な過程である。時には石が流れて木の葉が沈むこともある。それなりに真摯ではあったが小ざかしく器用に表面的な勝ちを占めた専制支配者などより、もっとつきつめてほんものを追求しようとしたがゆえに、状況の壁にぶつかり傷つき倒れた数多くの未発の営為がある。結果論的に勝ったものが「官軍」と確認するだけの歴史研究なら、無意味どころか有害でさえあり、うもれてしまっている未発の契機を探り当てることにこそ意味がある、と¹²。

梶村の指摘通り、権力闘争に勝ち残った者を「官軍」に祀りあげる歴史叙述は、「支配者」の視点を内面化しているために有害である。たとえば、王朝または権力が交代した後に書かれた公式的歴史は、勝った権力に「公」の地位を付与することで、政治的対立と闘争の過去を削除ないしは抽象化し、闘争の結果物、すなわち権力を「自然化」する。しかし、そうした場合に限らず、実にすべての叙述された歴史は勝利者の歴史だといえる。すべての叙述された歴史には、叙述する者、すなわち生き残った者の自己肯定や自己正当化のナラティブが底辺に居すわっているからである。ところが、梶村はあえて傷つき倒れた「未発の契機」を探そうと試み、またそうすること「にこそ意味がある」と強調している。この「意味」という表現から、彼が当時参照して強い影響を受けたらしい咸錫憲の『意味において見た韓国歴史』のエコーを聞くこともできるが¹³、梶村が「救済」しようとしたのは、ほかでもない敗北者たちの歴史である。

このように見れば、彼の「内在的発展」の論理は、「収奪論」の単純なナラティブ、すなわち日本帝国主義により国土が侵奪された植民地を否定することによって、またそのなかで営まれた民衆の日常的な生を否定し、もっぱら「敵」としての日

本との対立を叙述の基本軸とし、植民地の外で独立のために戦ってきた人々の闘争史を中心に置こうとする、いわゆる「亡命者史観」のナラティブとは区別されなければならない。彼もまた植民地支配に抵抗する民族解放運動から「朝鮮人の作り出した最高のもの」¹⁴を発見するが、彼が探し、表し、叙述しようとするのは、そのような詩的な瞬間というよりも、むしろ「歴史の底層を脈々と地下水のように流れ続け」¹⁵ている民衆の散文的な生とそのなかのエネルギーであった。

植民地民衆の生は、民族解放運動から解放後の朝鮮半島南北の新しい国家へ繋がる支配的・公式的叙述によっては完全に再現できないのはもちろん、その支配的叙述によって特定の形式で横領されたりもする。梶村が探究した「内在的発展」の軌跡が敗北の歴史を救済することに繋がっているとすれば、彼の「内在的発展論」とは、資本主義的近代化を成し遂げうる内的動力を歴史的に立証することによってこの横領を承認することではありえない。むしろそれとは対照的に、彼が探そうとしていたものは、資本主義的近代化の歴史がうずめてしまい、歴史の市民権を剥奪されたまま「地下水」を通してのみ流れている「異なる」近代化の道であった。否定された形態で存在する「未発の契機」は、否定されたというその事実のため、唯一の必然的な近代なるものを知らない。こうした意味での「未発の契機」に注目することで、梶村は「世界史の地下水」にも目を向けることができた。

侵略・植民地下の朝鮮という極限状況の中でも、はっきり見えてくるのは、朝鮮民衆のこれに抗する自主的な「近代」のための営みである。[中略] 例えば、同じ欧米に学ぶにしても、日本からの視線が、英・独・仏など「大国」に局限されがちなのに対し、朝鮮の思想家たちは、後進国・小国とされるイタリアや東欧の国やアイルランドなどに目を向けていく。表面的に日本の軍勢力による植民地が進行していく中で、しかし、かれらは思想的には挫折せず、アメリカ大陸系のピューリタ

¹² 梶村秀樹「朝鮮からみた明治維新」(1980年)『著作集 第1巻』pp. 143-144。

¹³ 咸錫憲の『뜻으로 본 한국역사』の日本語版翻訳は『苦難の韓国民衆史——意味から見た韓国歴史』(新教出版社、1980年)と題されている。特に、梶村が咸錫憲から引用している「世界史の下水溝」という表現については、梶村秀樹「日本帝国主義の問題」(1977年)『著作集 第2巻』p.326を参照。

¹⁴ 梶村秀樹前掲「排外主義克服のための朝鮮史」p. 55。

¹⁵ 梶村秀樹前掲「朝鮮からみた明治維新」p. 143。

ニズムを手がかりに、うわべの物質的な力よりももっと本質的な内面的な価値観と主体性をきたえつつ、「民衆の中へ」入っていく道を選んだ¹⁶。

梶村の「未発の契機」とは、時間的であり、また空間的な脈絡を持っている。すなわち、まだ到来していない近代を向く、要するにその志向性においては近代的であるが、まだ十分に近代的ではないある力を指示している点で、それは時間的である。そして、他方では、表面に現れていない深層の動き(「地下水」)を指示しているという点で、それは空間的でもある。それは、まだないことでもあり、ありながら見えないことでもある。しかし、引用文からもわかるように、「未発」の時間性と空間性とは分離不可能である。その文脈では、イタリア、東欧、アイルランドは、ただ先進国を追いかける「後進国」として視野に入ってきたのではなく、世界資本主義体制のなかで(相対的に)敗北者の席を占めているものとして喩えられたと見なければならない。それは、価値論的に「民衆」の席と同格である。

こうした梶村の観点を考慮すれば、「未発の契機」とは、先験的に存在する近代資本主義の概念を歴史に適用したり、現在の状態を過去に投射したりして発見しようとする(実は「構成しようとする」)、したがって、ある意味では過去を植民地化する「資本主義の萌芽」とは根本的に異なる。「未発の契機」の主な意義は、ただ「契機」として存在する「まだない(noch nicht)」ものを現在の前史として構成することにあるのではなく、すでに敗北して現在化されえなかった「もはやない(nicht mehr)」ものから異なる契機を探ることにあるからである¹⁷。これはもちろん、近代朝鮮が資本主義的近代化の道に収斂しえない他の可能性を持っていたことを表わそうとする試みだと見ることもできるが、歴史的現在を可能にしながらも、実際にはその現在から疎外されている「歴史的なもの」の潜在性を思惟させる点で意味深い。

そもそも、梶村が「未発の契機」という概念を領有することになったのは、朝鮮近代史を研究する日本人なら避けることができないジレンマを感じたからである。すなわち、内在的発展の潜在力が存在したはずなのに日本の植民地になってしまった朝鮮にはいったいなにが足りなかったのか、そして日本人が朝鮮植民地化の歴史を反省することも、結局は勝った者のゆとり過ぎないのではないかと問うたある在日朝鮮人の大学院生の質問を振り落とすことができなかった彼の悩みから、それは始まった。彼は、この懊悩のなかで、日本の近代資本主義の発展が物質的には勝ったかもしれないが、その過程で失った「ほんもの」¹⁸を、敗北した朝鮮の歴史に探ろうとしていたのである。この「ほんもの」とはなにか。それは資本主義的近代化によって敗北した社会主義的または非資本主義的発展の可能性を意味することでもあり、物質主義的文明と発展の概念が排除してきた精神的価値または還元不可能な固有性を意味することでもある。しかし、いずれにせよ、それが本質化された理念でも実体化された対象でもないとするれば、「ほんもの」とは、歴史の進行を可能にするが、その進行の過程では浮かび上がらない「歴史的なもの」の潜在力といえるのではないか。この潜在力に梶村が付けた名が、ほかならぬ「朝鮮民衆」だったのではないか。

「未発の契機」は、単に資本主義の萌芽でないのはもちろんのこと、まだ成長していない階級意識を指示する機能に単純化することもできない。さらに、現在によって敗北させられた「未発の契機」は、そのまま未来のための代案として活性化させることもできない。「未発の契機」から未来への代案を探すということは、その契機が現実化しないように敗北させ、黙殺してきた歴史があいかわらず支配している状況では、浪漫的な自己慰安以上にはなれないからである。梶村の「未発の契機」を今日の視点からまた領有するとすれば、それはむしろ今日の支配階級が「再現＝代表(represent)」すると自任しながら沈黙させている少数者の声、世界資本主義体制の支配秩序には顕れることのない敗北者たちの痕跡、現在の歴史が自らの言語に翻訳することで沈黙させた過去の独

¹⁶ 同前、p. 145。

¹⁷ この点で、梶村が「未発の契機」に言及した際、自己の家族史を通じて明治維新以後の日本近代史の支配的流れに「からめとられていた」日本民衆の多面性を見ようとしたのは意味深長である(同前、pp.146-150)。

¹⁸ 同前、p. 137。

自性と関連している。

したがって、いまいちど、この「未発の契機」は「まだない」契機ではなく、逆説的だが「もはやない」契機として読むべきである。「もはやない」ものであるがゆえに、「未発の契機」とその「契機」を発見しようとする者とのあいだには、浪漫的な投射で消すことができない明白な限界領域が置かれる。この限界領域が維持される時こそ敗北の「深刻さ」も理解でき、敗北の歴史の救済も可能となるだろう。梶村は、こうした意味での「限界」について自覚的だったように思われる。

4. 翻訳不可能性

梶村秀樹はなぜ朝鮮史を研究しようとしたのか。彼は自分自身に絶えずこの問いを投げかけながら朝鮮史研究にあたった。その意味で、彼は「朝鮮史を研究する日本人」という自意識を明らかに持っていた。この問いと意識を一貫して持っていたがゆえに、彼は朝鮮（人）に対しても、日本（人）に対しても、さらに歴史と世界に対してもユニークな観点を取ることできた。彼が「内在性」の観点を堅持し、「未発の契機」を重視したことも、このような自意識の作用と分かち難く結びついている。

ところが、この自意識は、逆説的ながら「外部」に対する敏感な感覚を示すことでもある。朝鮮史の根本動力を「内在性」から見出す梶村が、「外部」に対する感覚を持つとはどういうことだろうか。彼が朝鮮史の発展の「内在性」を見出せたのは、彼が日本人として朝鮮史を見ているということ、すなわち自分自身は決して円満にそこに「内在することができない」という感覚を強く持っていたからである。彼は、自分が日本語で語られる世界から朝鮮語で語られる世界を見ているという事実を決して忘れようとしなかった。

日本人は、あまりにも当然のことではあります。朝鮮の事を日本語でまず考えるようになる。朝鮮の事にかぎらずすべてを、つまり自分達を或いは世界を日本語によって考える。そして日本語の世界の中で朝鮮の事を考え、何となく日本語を通じて朝鮮のイメージを貯える。僕ももちろん例外ではなかった。

それが勉強の過程で、そのようにして日本語で出来ている自分の頭の中にある世界ないしイメージと、朝鮮語によって語られる言葉の中にあるイメージ、世界というものが違うんじゃないのか、ということに気づいて驚きを感じたわけなんです¹⁹。

日本人は日本語で想像し、朝鮮人は朝鮮語で想像するという、この単純な事実から驚くべき自覚を得ることができたのは、日本語で想像される世界に「朝鮮」を導入したからである。いや、厳密に言えば、日本語の世界に「朝鮮語の世界」を突っ込んで衝突させたからである。

概念の世界は「母語 (the vernacular)」の身体性が蒸発することを要求する。概念的真理はどの母語で発話されるかにかかわらず、同一の真理として認識され、通じなければならないからである。近代的な「普遍的主体」は、このように普遍的な概念的真理を認識することによって、まるで世界を所有しているかのような幻想の上に立っている。これに対して、母語の身体性が自覚されるとき、「普遍的主体」は、たとえばある小さな国の都市周辺で暮らしている一小市民という現実の存在にまで降りてくることになる。梶村は、このような自身の母語が枠づける「限界」を意識しつつ、同一の限界を持っている翻訳不可能な世界に出会おうとしている。自分の頭のなかで、日本語で構成されている朝鮮と朝鮮語の世界のなかの朝鮮が違うだろうということを絶えず意識しながら。

梶村のこのような自覚は、自己意識の上に浮かぶ対象と実際の対象との差異を認める一般的な反省的認識論の態度とはまた違う。なぜなら、反省的認識論では、たとえ意識のなかの対象と実際の対象との差異を認めるとしても、その差を放っておいたり狭めたりする行為の決定権は徹底的に「自己」に帰属するからである。つまり、その差を認めようと無視しようと、いずれも対象との独白的関係はまったく変わらない。しかし、日本語の世界と朝鮮語の世界は、互いに対等で独自の限界を持ったまま向きあっている。さらに、日本語の世界には日本語で想像される日本と朝鮮が、朝

¹⁹ 梶村秀樹「朝鮮語で語られる世界」（1975年）『著作集第1巻』p. 79。

鮮語の世界には朝鮮語で想像される朝鮮と日本が存在しており、このそれぞれの言語の世界において日本も朝鮮も同一ではない。

言ってみれば、日本語で語られる世界では朝鮮人の事が、せいぜい、例えば日本帝国主義が侵略し、さんざん悪い事をやってきた相手という意味で、気の毒な人たちという感じで捉えられる。そういう世界では、当事者たちは身のおきどころがない気がしていたのでしょう。日本国家が朝鮮人に対して、表面的に何をしてきたのかという事、つまり侵略の歴史を捉えるには日本語の世界で、ある意味では十分かもしれません。ところがそういう図式の世界に登場する朝鮮人はどうしても、日本人が主体である中で、いわば風景が客観的に眺められるのと同じように、極端に言ってしまえば、そのような受け身の立場でしか登場してこない。いつも、受け身に日本帝国主義の被害をこうむっている、気の毒な犠牲者としてしか登場してこない。僕自身も日本語によって朝鮮を認識していた当初においては、そういう感覚で朝鮮問題を理解していたと思います。ところがそうではない。在日朝鮮人の生活も含めて、朝鮮人が主体であるような世界というものが、当たり前といえは当たり前ですけれど、別に確固としてあるわけでは、日本語の世界は朝鮮人を客体化する世界であるとすれば、朝鮮語で語られる世界は、朝鮮人が主人公であり主体である世界です²⁰。

日本語の世界と朝鮮語の世界というのは、単に異なる言語構造の世界を指すのではなく、それぞれ日本人が主人公である世界と朝鮮人が主人公である世界、いいかえれば、日本人が見て感じる世界と朝鮮人が見て感じる世界を意味する。日本人の視界のなかに入ってくる世界と朝鮮人の視界のなかに入ってくる世界とは、決して同一ではない。それぞれの主人公のそれぞれの視界のうちに、対象は互いに異なった秩序で配置される。このそれぞれの主人公は、互いに相手の視線によって対象

の位置に置かれる。主語が見る世界と目的語が見る世界は同一ではない。ここまで考えを進めてみれば、「日本語で朝鮮をすべて理解しうる」²¹と信じること自体が驚くべきことである。この態度は、日本が朝鮮を植民地化し、「内鮮融和」「内鮮一体」を通じてひとつの世界を作ろうとした企図の空虚さを表すと同時に、現在まで日本で（在日）朝鮮人に対するステレオタイプが絶えず再生産される現実を根本的に批判するために見据えなければならないことでもある。

したがって、日本語で語られる世界と朝鮮語で語られる世界とは相互に翻訳不可能な世界である。梶村はこの翻訳不可能性を鋭敏に感じとって意識している。「歴史の文献というように無数にある本の中のどれかを選択して読んでいくわけで、全面的に訳すなどということは、だれにだって不可能な話」²²である。梶村は、この翻訳不可能性を認識しつつ、朝鮮語の世界、「朝鮮語でしかわからない感覚」²³を理解しようとする。

以上をふまえると、梶村の「内在性」の観点とは、逆説的に「外部」の存在を忘れまいとする努力の産物といえる。いいかえれば、理解不可能な他者の存在、ある種の命がけの跳躍（fatal leap）を覚悟しなくては渡れない懸隔をあいだにおいて向きあっている他者の存在を忘却しないようにする試みの産物といえる。彼にとって「内在性」とは、外部の存在を隠蔽や忘却することによって、内在的な力や決定、つまりは主権性を神秘化する概念ではなく、還元不可能な外部の存在を条件とするからこそ構成できるのである。

梶村が戦後日本の論壇で作られたアジア主義のブームを警戒しつつ、日本のアジア主義者たちが「ヨーロッパを敵対者とみなすことによってインタナショナルでなかったばかりでなく、彼らにとっての『アジア』は、むしろ『日本』の拡大概念としてのアジアにすぎなかったばかりが多い」²⁴と牽制したときの「インタナショナル」という表現も、外部に対するこのような彼の感覚を念頭に読まなければならない。多くの日本のアジア主義

²¹ 同前、p. 79。

²² 同前、p. 88。

²³ 同前、p. 86。

²⁴ 梶村秀樹「現在の『日本ナショナリズム』論について」（1965年）『著作集 第1巻』p. 115。

²⁰ 同前、p. 81。

者たちが「西洋＝近代」の対立項としてアジアを立ちあげることで——「近代の超克」のイデオロギーが内包している複雑な問題系はさておくとしても——アジアの内部の「ナショナルな差異」を「帝国の内部のローカリティの差異」に置き換えたことはよく知られている。梶村は、アジア主義がアジアの内部の還元不可能で翻訳不可能な他者性を理解するのに無力で、むしろ他者性を抑圧してきたことを批判している。

しかし、なぜこのような翻訳不可能な他者と苦勞して出会わなければならないのか。梶村がこの骨の折れる仕事を自らに課したのは、朝鮮の近現代史と日本の侵略史とを「あるがまま」に表すためではない。むしろ、日本の歴史に対する根本的な自己批判の拠点を求め、資本主義的近代と反共―冷戦体制の支配秩序を「下から」批判できる契機を探すことに、その究極の目的があった。彼の思考の中心には、彼自身とともに、この理解不可能で翻訳不可能な朝鮮があった。要するに、梶村にとって、朝鮮は探求の対象ではなく、世界を見通すひとつの目であった。「朝鮮問題が特殊な問題として取り組まれるというのではなく、あらゆる問題を考える中で、朝鮮を決して忘れないということが必要だと思います」²⁵。

5. 視差的観点

梶村の近代批判は、ふたつのレベルで行われていたと見える。先にも述べたように、彼は物質的・文明的過程としての資本主義的近代化を根本的に批判する立場にいた。この資本主義的近代化が帝国主義と植民地主義を生み、不均等と暴力を生んだからである。しかし、彼の近代批判はもうひとつのレベルでも行われていたと見える。ほかでもなく、近代的な自己認識、あるいはそれが拡大されたかたちとしての一国史的認識の限界に対する根本的批判をしている。彼は、時間的には、近代的＝資本主義的発展の線形的モデルを、空間的には、近代的＝自己中心的世界構成のモデルを越えようとした。いいかえれば、時間的には、世界的次元で不均等発展を構造化している資本主義的近代の搾取体制を越えようとし、空間的には、近代的な主体が置かれている領土（自我、国民、国土、

国語）を越えて他者に向きあおうとした。

この論考で注目した彼のキーワードのすべては、このふたつの側面と連関している。「未発の契機」が敗北した過去を通して単線的な近代の時間を相対化するのと同時に、歴史の底層で「歴史的なもの」の潜在性を発見させるものだとすれば、「内在性」とは、外部と同一のレベルには位置づけられない翻訳不可能な他者の存在を示唆する概念であると同時に、多数の時間性が湛える固有性を知覚させるものである。特に、「朝鮮史を研究する日本人」としての彼の意味深長な位置、そしてその位置に対する彼の鋭敏な意識は、彼に特別な観点を与えた。それは、いわば「視差的観点(parallax view)」といえるだろう。視差的観点とは、「ふたつのレベルのあいだにどんな共通言語や共有する基盤も存在しないがゆえに、高次元的な総合に向けて決して弁証法的に『媒介／止揚』できない根本的な二律背反(antinomy)」²⁶を意味する。彼は、日本語の世界と朝鮮語の世界との翻訳不可能性あるいは二律背反性を鋭く感じとりつつ、互いに異なる主語たちが作りだす世界を見つめることができるふたつの目を持つようとした。しかし、このふたつの目は決してひとつに焦点化できないからこそ「視差的」である。

けれども、歴史学がこの「視差性」の二律背反に耐えるのは難しい。二律背反の間隙を明敏に感じとりはしたものの、「歴史家」としての梶村の叙述は、ある一貫性の枠組みのなかにひきこもらざるをえなかったように見える。彼が早くにこの世を去ってしまい、以後の展開は永遠に未決定のまま残されたが、ある「法則性」に還元されるような傾向は、特に彼の晩年に、表立って現れていたようだ。

最も広い意味では、内在的発展論とは、一国史を、停滞的・他律的なものとしてみるのではなく、国内的な契機の法則的展開に即して発展してきたものとしてとらえようとする方法論であるといえることができる。そして、巨

²⁵ 梶村秀樹前掲「排外主義克服のための朝鮮史」p. 32。

²⁶ スラヴォイ・ジジェク(キム・ソヨン訳)『視差的観点』(マティ、2009年 *韓国語)p.14。日本語版では、同(山本耕一訳)『パララックス・ビュー』(作品社、2010年)p.15に該当するが、ここでは韓国語版から訳出した。

視的な意味での一国史的発展の基本的原動力は、下からの契機、つまり基層民衆＝直接生産者の生産・再生産における創造的営為、その枠組としての生産力と生産関係の対応関係と矛盾、そしてそれに条件づけられた意識の成長と階級闘争の展開等であると考えられる。その意味では、それは史的唯物論の方法で一国史を対象化するというのと別のことではなく、いわばごくあたりまえのことなのだが、前述のようにそれをあたりまえと考えない傾向が存在するかぎりにおいて、自覚化される必要があるのである²⁷。

引用文でも、梶村は近代資本主義の発展の世界史的側面と内在的発展との関連を強調しているものの、内在的発展論を説明する場面では、史的唯物論の一般法則に対する強調が目立つ。もちろんこれは、吉野誠が指摘するように、「ことさらに特殊性＝停滞性のみが言い立てられてきた朝鮮史において、それを克服するためには普遍性にもとづく追求をいくら強調してもし過ぎることはないのだという、朝鮮史研究を進展させるための戦略的な色彩のつよい発言」²⁸の延長線で理解できるかもしれない。時代区分、発展動力、連続性などの問題から逃れることができない歴史家の文法のなかで、「視差的観点」を一貫して維持することはやはり難しい。しかし、はたしていま、彼の成否を判定することにどれほど重要性があるだろうか。むしろ私たちは、彼からある種の「一貫性」を抽出することより、梶村のために、また私たちのために、彼から「未発の契機」を探ろうとしないかならないのではないか。一国史に還元せずに「内在性」を見据えることができる目、敗北の歴史を浪漫化せずに救済することができる目を鍛えるために、捉えなければならないのは、梶村の「結論」ではなく、彼の「未発の契機」ではないだろうか。

(ちゃ すんぎ・聖公会大学東アジア研究所)

²⁷ 梶村秀樹「朝鮮近代史研究における内在的発展の視角」(1986年)『著作集 第2巻』p.165。

²⁸ 吉野誠『『朝鮮史の方法』解説』『著作集 第2巻』p.378。